

報告

大学における世界史教育の現状と課題(2)
—世界史学習に関する大学生たちの意識調査—
Current Situation and Problems of World History Education
at Universities in Japan

鈴木道也*1, 吉原秋*2, 小川春美*2, 安井萌*3, 小川知幸*4, 畑奈保美*5, 津田拓郎*6, 池野健*4
Michiya SUZUKI, Aki YOSHIHARA, Harumi OGAWA, Moyuru YASUI,
Tomoyuki OGAWA, Naomi HATA, Takuro TSUDA and Takeshi IKENO

Keywords: World History Education, History Education, Learning Motivation,
世界史教育, 歴史教育, 学習動機づけ

1. はじめに

私たちの研究グループは、2014年度から「世界史教育と外国史研究との連携・協働に向けた総合研究—岩手県における世界史教育の現状と課題—」をテーマに共同研究を続けてきた。この研究では、高校における世界史教育の現状と課題を明らかにし、また大学生が世界史教育に期待しているものを確認することで、大学における世界史系授業改善のための手がかりや、世界史教育における高大連携の可能性を探ることを目的としている。

研究の一環として全国各地の大学生を対象として実施した世界史学習に関するアンケートの分析を進めた結果、詰め込み型の授業形態であることを理由に教科としての世界史に苦手意識を持つ学生が依然として多いこと、「国際的志向性」を持つ学生は世界史学習に対してより高い重要性を認めていること、最近の学生は教養としてよりも実用的なものとして世界史の知識を捉える傾向が強いこと、などが明らかになりつつある(吉原ら(2017)、小川ら(2017)、安井ら(2017))。こうした成果をもとに、高校そして大学においていかなる世界史教育が可能か、方法論的な検討や実践的な試みを進めていくことが今後の課題となる。

本報告では、そうした具体的な作業に入るための前段として、いくつかの論点を整理しておきたい。以下、大学教育における人文学系分野の在り方をめぐる最近の議論、さらに世界史教育を含む高校・大学の歴史教育にかかわるいくつかの取組を確認する(以下2.)。次に、歴史学習に関する大学生たちの意識を探ることを目的として今回新たに実施したアンケートについて、その内容と結果を紹介する(以下3.)。

2. 歴史教育の在り方をめぐって

大学の認証評価機関のひとつである大学改革支援・学位授与機構が、文部科学省先導の大学改革推進委託事業として実施・公表した「大学教育における分野別質保証の在り方に関する調査研究」の報告書(2017年3月)によ

れば、人文学系の学修成果には次のような特徴がみられるという。

「人文学系では卒業後に、専攻した学問分野とは直接的には関係しない職に就くことも多い。そのため、学問分野に特有の知識やスキルだけでなく、文学部全体に共通するスキル(主にはジェネリックスキル)や、様々なスキルや知識を活用して課題に対応するための能力(キーコンピテンシー)がいかにか身に付いているかも重要である。

・人文学系の学生が高度に身につけることが期待されるジェネリックスキルやキーコンピテンシーとは、文章表現力、コミュニケーション能力、深い思考や論理的・批判的思考、ひらめき、多様な文化を理解し共同する力などを含むものである。

・これらの能力は、就業力(エンプロイアビリティ)と市民性(シチズンシップ)の両面から考えることができる。就業力の面では、専攻した学問分野と直接的に関係しない職業にも適応しうる能力を育成しているかが重要となる。市民性の面では、人文学の学びを通じて市民としての自らを深めていくことが学修成果となる。

・ただし、このような共通的能力も、専攻した各学問分野における深い学修を通じて養成されるものである。人文学系は、卒業後の就職などの進路が専門分野と直結しない場合が多いために、他分野と比べて、学修成果としての共通的能力がより注目される傾向がある。」

報告書は結論として「各大学が内部質保証において分野ごとに(すなわち、プログラム等を単位に)質保証を実施することを促進することが必要である」と主張する。「質保証の実施」という言葉が新たな評価システムの構築とその運用を求めているのであれば、報告書の主張に直ちに同意することは難しい。形式的な評価への対応に翻弄され疲弊している大学の現状は深刻である。しかし「(人文学系の学生が共通して身につけることが期待さ

*1 東洋大学、*2 国際文化学科、*3 岩手大学、*4 東北大学、*5 東北学院大学、*6 北海道教育大学

れる能力も) 専攻した各学問分野における深い学修を通じて養成されるものである」との指摘は、これまでの大学における教育経験に照らして大いに首肯できる部分である。

また吉見俊哉は、2015年の5月から8月にかけて新聞紙上を賑わせた、いわゆる「国立大学文系問題」を受けて出版した『「文系学部廃止」の衝撃』のなかで、「価値創造や新しい価値の軸を導くためには、複数の価値の軸に対する幅広く射程の長い視点を持っているような学問」が必要であり、人文学系の学問はその可能性を有していると主張した(吉見(2016))。この主張を先の指摘と組み合わせるならば、人文学の知には価値創造的な有用性があり、学生にとっては、そうした知を学び修めることが就業力や市民性の涵養につながることになる。人文学の一角を占める歴史学、およびその成果に基づいて展開される歴史教育においても、こうした有用性の観点から将来像を構想していくことは、一見迂遠にみえるかもしれないが充分可能でありまた必要であろう。

もっとも、大学をとりまく環境の厳しさに加え、歴史教育の現場も大きく変化しており、時間をかけて議論を進めていくことは困難になってきている。2020年からはセンター試験の後継形態として「大学入学希望者学力評価テスト」が導入され、記述式問題が出題されることになる。高等学校では、次期学習指導要領の作成に向けた中央教育審議会の答申(2016年末)において、世界史必修修に代えて、世界史と日本史の近現代史部分を統合した「歴史総合(2単位)」の新設と、選択科目としての「世界史探究」と「日本史探究」(各3単位)の設置が提案され、2022年度からの実施が予定されている。さらに、小中高のすべての科目において「主体的で対話的な深い学び(アクティブ・ラーニング)」の導入が予定されている。歴史教育の在り方をめぐる最近の議論は、こうした間近に迫った種々の改変や再編への対応を喫緊かつ直接的な課題としている。

例えば2017年5月に一橋大学で開催された日本西洋史学会では、「思考力育成型歴史教育への転換と大学入試改革をどう進めるか」をテーマに小シンポジウムが開催された。報告者・報告題は以下の通りである。小川幸司「高校歴史教育における用語精選と思考力育成型授業への転換をデザインする」、姫岡とし子「歴史教育とジェンダー」、近藤孝弘「思考力を重視する歴史の大学入学資格試験のあり方について—アビトゥア試験を中心に—」。

また2015年6月に創設された高大連携歴史教育研究会(会長:油井大三郎)は、歴史的思考力を育成する授業を増やすためには肥大化した歴史用語の精選が必要であるとして、日本学術会議高校歴史教育分科会や日本歴史学協会歴史教育特別委員会と連携して、「高等学校の歴

史教科書と大学入試の歴史系の出題用語に関連した用語精選基準に関するアンケート調査」を実施している(実施期間は、2017年12月から2018年2月末まで)。研究会は「用語精選基準の具体的なイメージを理解しやすくする」ことを目的として2017年10月に用語精選第1次案を公表したが、日本史分野の用語のなかに坂本龍馬、上杉謙信、武田信玄などが含まれていなかったことで話題となり、研究会の活動は新聞でも盛んに取り上げられることとなった。しかし用語の有無ということにばかり目が向いてしまうと、議論が本来の趣旨を離れて矮小化されてしまう危険性もある。

本報告ではそうした議論からは少し距離をとり、どちらかといえば歴史教育の有用性という観点から、過去のアンケートを通して明らかになってきた世界史教育(世界史学習)に対する学生たちの意識を、もう少し掘り下げて考えてみたい。大学における世界史系の授業には、大きく分けて「教養教育科目」「専門教育科目」「教職科目」の三種類がある。教養教育科目のなかにも、主として人文社会系の学生を対象とするものと理工系の学生を対象とするものがあり、また専門教育科目といっても、学部1年生を対象とするもの(「概説」など)と、2年生を対象とするもの(「特講」など)では、内容・難度・授業方法にかなり違いがある。大学における世界史系授業の実態はきわめて多様である。ただ、いかなる授業科目であれ、授業展開に際しては教育目標と受講生実態との摺り合わせが必要になる。学生たちがどのような知識と意識をもって授業に臨んでいるのか、それをきちんと把握しておくことは重要である。

3. 「歴史好き」の学生たちが大学の歴史教育(歴史学習)に望むもの

これまで実施してきたアンケートから、大学の人文社会系で学ぶ学生には、①高校世界史に苦手意識を持っている、あるいは苦手意識は持っていないがその重要性を認められず、自ら積極的に世界史の知識を得ようとはしない学生、②そうした「世界史離れ」を起こしておらず、世界史学習に好意的で意欲的な学生、③歴史そのもの、あるいは高校で学ぶ教科としての「日本史」や「世界史」が好きで、大学で歴史学を専攻する学生、などがある。今回の報告では③の学生に焦点をあてる。進路として文学部の史学科を選択した彼らは、どのような体験を経て、またどのような点において歴史という分野に関心を持ち、さらに進路として史学科を選ぶに至ったのだろうか。彼らは大学での学びにどのようなことを期待しているのか、また大学における歴史学が彼らの期待に応えうるものとなっているのか考えてみたい。研究グループが主たる調査対象としてきたのは世界史学習であり、また目標とす

るのは世界史学習の望ましい在り方であるが、本報告の対象は日本史分野も含む大学における歴史学習全体である。

3-1. アンケート調査の方法と内容

アンケート調査の対象は、東洋大学文学部史学科に所属する学部3年次の学生である（一部質問項目については学部1年生も対象とした）。東洋大学は首都圏に位置する大規模私立大学のひとつである。文学部史学科は1学年の定員が133名で、2年次から日本史、東洋史、西洋史の3専攻に分かれる。各専攻に定員や受入条件はなく、学生は自分が希望する専攻に進むことができる。専攻ごとの学生数は年度によって異なるが、おおむね日本史6割、東洋史1割、西洋史3割である。学科の基本的なカリキュラムは、1年次に初年次教育科目として「歴史学研究法」を、また概説科目として「日本史・東洋史・西洋史概説」を履修し、専攻が確定した2年次以降、専攻ごとに開設されるより専門的な「史料研究」「特講（特殊講義）」「演習」を履修する。学生選抜の方法は推薦入試、個別入試、センター利用入試と多様であり、面接のみで入学する学生もいれば、センター試験で国語、英語、地歴に加えて数学を含む4教科を受験してくる学生もいる。ここ2、3年は東アジア、とくに中国からの留学生の数が増加してきている。実習を含む所定の単位を修得すれば、中学校教員1種免許状（社会科）と高等学校教員1種免許状（地歴）および博物館学芸員資格の取得が可能である。

アンケートは、史学科3年必修科目である「史学概論」（通年・4単位）の授業時間内に、ToyoNet-Aceと呼ばれるWEBベースの授業支援システムを利用して実施した。回答は任意であったが、履修者134名中113名から回答を得た。なお、専門科目の履修が始まっていない学生の考えも知るために、史学科1年の必修科目「歴史学研究法」の履修者43名を対象とするアンケートも実施した。こちらも「史学概論」同様にToyoNet-Aceを用いたが、回答時間を授業時間外に設定したためか、回答数は21にとどまった。1年生からの回答は、本報告では一部のみ紹介する。

アンケートの質問項目は以下の通りである。

問1：大学の専攻として史学科を選択するにあたって、高校で受けた歴史の授業は影響を与えていますか。

- 1 大いに影響を与えた
- 2 多少は影響を与えた
- 3 あまり影響を与えていない
- 4 全く影響を与えていない

問2：問1で「大いに影響を与えた」「多少は影響を与えた」を選んだ人にお聞きします。その影響とは具体的にはどのようなものですか。

問3：問1で「あまり影響を与えていない」「全く影響を与えていない」を選んだ人にお聞きします。では、史学科を選択するにあたって、あなたに大きな影響を与えたものはなんですか。

問4：大学に入って「概説」「特講」「演習」「史料研究」「卒論演習」などの授業を受けるなかで（1年生向けアンケートでは「大学に入って「概説」などの授業を受けるなかで）、あなたが高校時代に想像していた「歴史」を学ぶということと、大学で実際に学んでいることとの間に違いを感じますか。

- 1 違いを大いに感じる
- 2 違いを多少感じる
- 3 あまり違いを感じない
- 4 全く違いを感じない

問5：問4で「違いを大いに感じる」「違いを多少感じる」を選んだ人にお聞きします。以下の空欄を埋める形で、あなたが感じる違いについて回答してください。

「高校時代は、大学で「歴史」を学ぶということは
□□□□だと思っていたが、実際に大学で学んで
みたら、□□□□だった。」

問6：大学における歴史の授業のなかで、ここまでとくに興味を引いた授業はありましたか。

- 1 大いにあった
- 2 多少はあった
- 3 あまりなかった
- 4 全くなかった

問7：問6で「大いにあった」「多少はあった」を選んだ人にお聞きします。それはどのような点においてですか。以下の中から選んでください（複数選択可）。「その他」を選んだ場合には、空欄に具体的に記入してください。

- 1 専門的な内容を知ることができた
- 2 学問研究の方法に触れることができた
- 3 新しいものの見方、考え方を得ることができた
- 4 実践的な知識を得ることができた
- 5 目的意識を高めることができた
- 6 その他

問 8: 大学を終えて社会に出てからの歴史学との関わり方について、あなたはどのように考えていますか。以下の中から選んでください(複数選択可)。

- 1 新しく刊行される歴史学関連の単行本・新書・文庫を確認し、興味を引いたものがあれば読んでみたい
- 2 大学等で開催される歴史関連のセミナーや講演会などに積極的に参加したい
- 3 自分が卒業研究でとりあげるテーマに関連する出来事(例: 日本古代史であれば平城京に関わる、フランス近代史であればフランスに関わるニュースなど)については、意識して情報収集に努めたい
- 4 ゲーム・マンガ・映画・小説などで歴史を題材とするものがあれば、より関心を持ってその内容を確認してみたい
- 5 高校や大学で身につけた歴史の知識や歴史研究の方法を活かせるような仕事に就きたい
- 6 社会に出てから得られる経験や技術を重視し、それらを増やしたり深めたりすることを優先したい
- 7 社会に出てからの歴史学との関わり方について、とくに考えていない

3-2. 結果

質問のうち単純集計が可能な問 1、問 4、問 6、問 7、問 8 の回答結果は以下の通りである(数字は回答数。アンケート対象者 134 名中、回答者は 113 名。問 7・問 8 は複数回答可であるため、回答総数は回答者数と一致しない。割合は、問 1、問 4、問 6 については回答数全体のなかで占める割合。問 7、問 8 については全回答者のうち当該の選択肢を選んだ者の割合)。

問 1:	1 大いに影響を与えた	37 (32.7%)
	2 多少は影響を与えた	42 (37.2%)
	3 あまり影響を与えていない	29 (25.7%)
	4 全く影響を与えていない	5 (4.4%)
問 4:	1 違いを大いに感じる	33 (29.2%)
	2 違いを多少感じる	37 (32.7%)
	3 あまり違いを感じない	41 (36.3%)
	4 全く違いを感じない	1 (0.9%)
問 6:	1 大いにあった	46 (40.7%)
	2 多少はあった	55 (48.7%)
	3 あまりなかった	11 (9.7%)
	4 全くなかった	0 (0%)

問 7:	1 専門的な内容を～	73 (64.6%)
	2 学問研究の方法に～	47 (41.6%)
	3 新しいものの見方～	68 (60.2%)
	4 実践的な知識を～	14 (12.4%)
	5 目的意識を～	5 (4.4%)
	6 その他	0 (0%)
問 8:	1 新しく刊行される～	48 (42.5%)
	2 大学等で開催される～	7 (6.2%)
	3 自分が卒業研究～	44 (38.9%)
	4 ゲーム・マンガ～	62 (54.9%)
	5 高校や大学で～	30 (26.5%)
	6 社会に出てから～	21 (18.6%)
	7 社会に出てからの～	16 (14.2%)

3-3. 考察

最初に、問 1 で選択肢 1 あるいは 2 を選んだ学生は 79 名、約 7 割 (69.9%) である。進路選択にあたって高校時代の授業が大きな影響を与えていることが分かる。問 2 に対する回答のなかで頻出するのは、「面白い」(20 回)、「楽しい」(11 回)、「深い」(5 回)、「詳しい」(5 回)などの形容詞であり、先生が面白くて楽しい授業をしてくれたことが学生の進路選択に大きな影響を与えている。問 1 で「あまり影響を与えていない」と回答した者のなかにも授業ではなく社会科の先生そのものの影響が大きかったとする者がおり、また高校ではなく中学校や小学校の先生あるいはその授業の影響を指摘する者もいて、教員の影響力の大きさがあらためて確認できる。学校以外の影響として、問 3 では、「マンガ」(4 名)、「ゲーム」(3 名)、「家族」(2 名)などの回答が見られた。

しかし高校の授業に影響を受けて史学科を選択した学生のうち、問 4 で選択肢 1 あるいは 2 を選んだ学生、つまり大学における歴史の授業に事前の想定との違いを感じた学生を次頁の表 1 のように整理してみると、49 名 (62%) いた。高校時代の授業がそれほど影響を与えない残りの学生 (34 名) のうち問 4 で選択肢 1 あるいは 2 を選んだ学生は 12 名 (35.3%) であり、その割合は大きく異なっている。高校の授業に影響を受けた学生の方が、大学での学びに関してより具体的な期待を抱いている分、高校時代に思い描いていた授業と実際の授業との違いに戸惑っているように思われる。

史学科には日本史、東洋史、西洋史の三つの専攻が存在している。表では専攻別の整理も行っている。西洋史分野では 80.0% の学生が高校時代の授業に影響を受けている。日本史分野ではその割合は 62.7% へと低下するが、大学の授業に違和感を感じた学生は 73.8% と、西洋史分

表1：史学科の学生にとっての高校の歴史と大学の歴史

	総数	高校時代の授業は「大いに」もしくは「多少」影響を与えた		大学での授業に「大いに」もしくは「多少」違いを感じる		「大いに」もしくは「多少」影響を与えたとする者のうち、「大いに」もしくは「多少」違いを感じる者		
		人数	割合	人数	割合	人数	割合	
全体	113	79	69.9%	70	61.9%	49	62.0%	
専攻	日本史	67	42	62.7%	45	67.2%	31	73.8%
	東洋史	6	5	83.3%	4	66.7%	3	60.0%
	西洋史	40	32	80.0%	21	52.5%	15	46.9%

野（46.9%）と比べかなり高くなっている。日本史分野では古文書購読を始めとして西洋史分野に比べて一次史料に触れる機会が多く、より強く専門性を感じることがこうした違和感の大きさにつながっているのであろうか。

そこで次に問5への回答を確認してみたい。「高校時代に想像していた「歴史」を学ぶということと、大学で実際に学んでいることとの間に違い」を感じた学生は、どのような点に違いを感じているのでであろうか。ここではテキストマイニングの手法を用いる。本報告では、小川ら（2017）と同様に株式会社ユーザーローカルが提供するフリーのテキストマイニングツール（textmining.userlocal.jp）を利用した。テキストマイニングは、データマイニングの手法を応用したものであり、アンケート回答者の自由記述のなかで用いられる単語の出現比率を分析することで、回答者全体の関心度のある程度明らかにすることが可能となる。ただしコンテキストは分断されてしまうため、同じ言葉がそれぞれの回答のなかで有していた意味の多様性については、別途慎重に検討する必要がある。

さは、与えられた文書の中でその単語がどれだけ特徴的であるかを表す）で示したものである。学生の実際の回答内容は本報告の末に付した表2の通りである（1年生の回答も含む）。

動詞「学ぶ」が最頻出であるのは当然として、それと関係する名詞としては「高校」（15回：回答文中での単語の総出現数、以下同様）、「研究」（6回）、「出来事」（6回）、「延長」（6回）、「授業」（5回）、「知識」（5回）が、また形容詞としては「深い」（8回）「詳しい」（8回）、「広い」（6回）が多く用いられている。「高校の延長の様に通史を学んでいだけ」（表2：整理番号63）、「浅く広くをちょっと深くもっと広く」（表2：整理番号51）といった回答に見られるように、高校の授業の延長線上に史学科での講義や演習を位置づけていたことが分かる。

では実際に授業を受けて学生たちはどう感じたのか。「……実際に大学で学んでみたら、だった。」のの部分に入った言葉をワードクラウドで示したのが図2である。

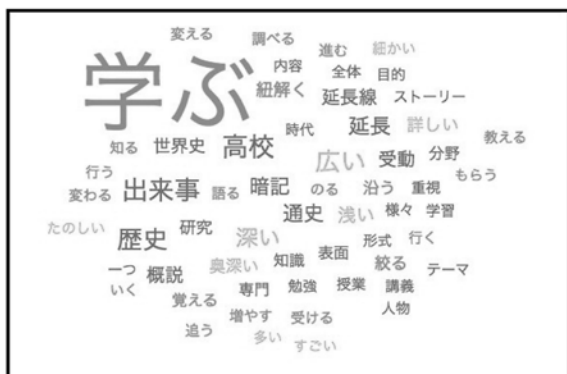


図1：ワードクラウド：高校時代に想定していた大学での歴史学習[学部3年]

図1は、問5への回答のうち、「高校時代は、大学で「歴史」を学ぶということはだと思っていた」のの部分に入った言葉を、ワードクラウド（スコアが高い単語を複数選択し、その値に応じた大きさで図示したもの。通常はその単語の出現回数が多いほどスコアが高くなるが、どのような種類の文書にも現れやすいような単語についてはスコアが低めになる。スコアの大き

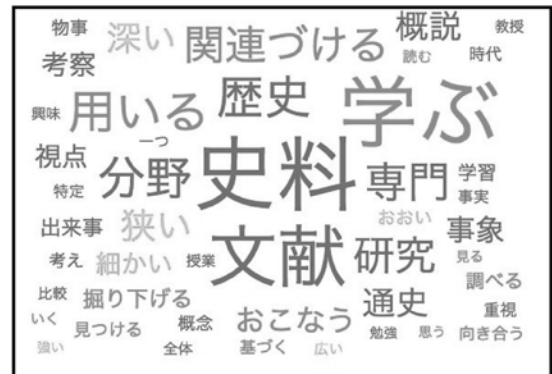


図2：ワードクラウド：史学科に来て実際に学んでみたら」[学部3年]

スコアが高いのは「史料」「文献」「学ぶ」「関連づける」「用いる」である。回答数でみると、名詞では「研究」（10回）、「専門」（8回）、「史料」（7回）、「分野」（7回）、「時代」（5回）、「視点」（4回）、形容詞では「深い」（6回）、「狭い」（3回）が上位となる。回答を日本史分野の学生に限定しても、この傾向は変わらなかった。（一次）史料との出会い、専門性の高

さや深さ、それが彼らが感じた大学における授業の「実際」であった。史学科カリキュラムの基本理念に位置づけられる「自分でその歴史上の出来事に関わる史料を見つけ出し、それらを自分で読み解き解釈をしていく」(表2: 整理番号42) ことを、彼らは高校時代には想像していなかったのである。



図3: ワードクラウド: 史学科に来て実際に学んでみたら[学部1年]

図3は、同じ問いに対する1年生の回答を図にしたものである。回答数が少ないため単純な比較はできないが、動詞では「狭める」、名詞では「史料」、形容詞では「狭い」のスコアが高くなっている。歴史に関する幅広い知識を身につけることを楽しみに史学科に進んでみたら、授業内容の狭さに戸惑っている様子が見えてくる。1年生が履修可能な専門科目は、初年次教育科目である「歴史学研究法」を別にすれば、概説科目のみである。教員にとっては概説的と思われる範囲と内容であっても、高等学校で学んだ通史の延長線上に大学での授業を位置づけている学生にとっては、その内容は「狭い」ものと映っている。ただし再び3年生の回答を整理した図2に戻れば、そこでは「関連づける」「掘り下げる」といった言葉のスコアが高くなっている。大学における学びを通して、歴史的思考力の重要性に気づきつつあるといえるかもしれない。

では、このような戸惑いを感じながら学ぶ史学科の学生たちは、授業から何を学ぶことができたと感じているのか。問7への回答をグラフで表したものが図4である。

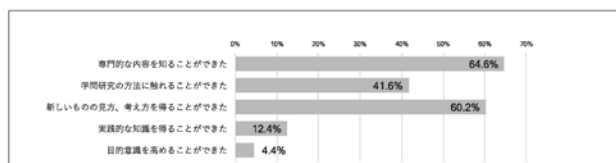


図4: 史学科の授業を通じて得たもの

ここでは学生の6割が、史学科の授業を通して「新しいものの見方、考え方を学ぶことができた」と感じている。ただし学部3年次までの学修活動で「実践的な知識を得ることができた」と考える学生は少なく(12.4%)、また「目的意識を高める」ような経験をしている学生はごくわずか(4.4%)である。

社会に出てからの歴史学との関わり方について質問した問8への回答は図5のように整理される。

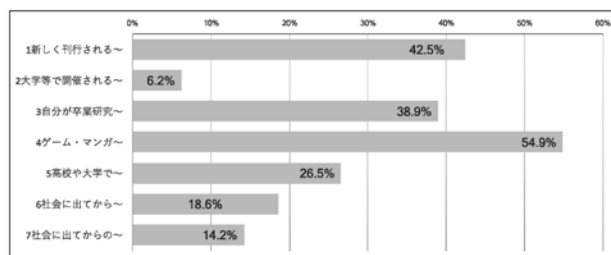


図5: 大学を終えて社会に出てからの歴史学との関わり方

「歴史の知識や歴史研究の方法を活かせるような仕事に就きたい」と考えている学生の割合(26.5%)は、史学科で卒業時に中・高いいずれかの教員免許を取得する学生の割合(2012年度から2016年度までの5年間の平均で23%)とほぼ一致する。学生の多くが具体的かつ明確な職業観を持って史学科を選択しているのであれば、この割合はもう少し高くてもいいはずである。彼らの進路選択は、「歴史が好きである」という素朴な思いに支えられている。このとき、ゲームやマンガなどの形であれ、歴史関連の情報への関心を卒業後も持続させたいと考えている学生の割合(54.9%)を高いとみるか低いとみるかは判断の分かれるところである。しかし「(4年次に)卒業研究でとりあげるテーマと関連する出来事について情報収集に努めたい」とする学生は4割弱(38.9%)にとどまり、卒業後に「大学等で開催される歴史関連のセミナーや講演会などに積極的に参加したい」学生にいたってはわずか6.2%しかいない。「歴史好き」の彼らにとって、大学で学ぶ歴史学ははたしてどのような意味を持っているのか、あるいは何ら意味を持っていないのか、あらためて考えてみる必要があるであろう。

もっとも、「社会に出てから得られる経験や技術を重視し、それらを増やしたり深めたりすることを優先したい」と考える者も2割弱(18.6%)にとどまり、全体的に知的好奇心の弱さが感じられる。歴史学への関心を深めたり持続させたりしようとする意識が学生たちのなかに乏しいようにみえるとしても、だからといって彼らが、歴史学ではない、それに代わる何かを強く求めているようにもみえない。

4. 結びにかえて

大学での学びに違和感を感じることはむしろ重要である。こうした違和感は、学生がこれまで身につけてきた知識を組み立て直し、新たな問題関心や視点をもって研究対象に取り組んでいく重要なきっかけとなり得る。しかし歴史が好きであることを自認して史学科に進学してくる学生が、大学の歴史教育に接して感じるギャップから「歴史離れ」あるいは「歴史嫌い」になってしまうことは避けなければならない。

あるいはまた、高校の授業に刺激を受けて進路として史学科を選択した学生の問題関心が、きわめて限られた時代や地域にとどまり、そこから広がりを持たないまま専門教育の「狭さ」や「深さ」に接続してしまうことも問題である。かつて筆者の一人は、中世ヨーロッパ史に関心があって史学科に入ったという、いわゆる「歴史好き」の学生から、中世を対象とする授業の終了後に、「授業のなかで現代社会との結びつきには触れないでほしい」という苦情を受けたことがある。学生によれば、社会の仕組みや文化が現代とは異なる中世についての話を聞けると思っていたのに、「ここから近代的な」とか「現代の紛争につながる」といった言葉が出てくると、混乱して授業に集中できなくなってしまうということであった。彼は現代社会と切り離された完結したものとして過去を捉えており、現代的な視点や解釈が持ち込まれることに強い抵抗感を示していた。それは一見非常に禁欲的で実証的な態度であるようにみえる。しかしその後の彼の学修活動をみていると、あらかじめ作り上げた時代像に適合的な（と学生が考える）情報ばかり選び取っていく傾向が強かったように思われる。こうしたことは歴史教育にとっても、また歴史学という学問の将来にとっても望ましいことではないだろう。

学生のこうした意識や態度と、歴史学を含む人文学が目指す方向との間にはあきらかに懸隔が存在している。この隔たりを埋めるために必要なことは何か。決して容易な作業ではないが、学生が歴史的事象に対して抱いている興味関心を尊重しつつ、歴史学の特性とその研究手法を少しずつ伝えていけるようなカリキュラムを構築する努力を怠るべきではない。

かかる試みは、専門教育だけではなく大学のその他の授業科目、例えば「国際的感覚」や「現代社会理解」をキーワードに展開される教養教育としての世界史教育などにも影響を及ぼしうる。第3節の冒頭で指摘したように、大学の人文社会系で学ぶ学生と「日本史」や「世界史」などの教科との関わり方、そして歴史との関わり方は様々であり、今回対象とした学生たちは学生全体からみれば少数派である。対して教養教育は、歴史的知識の量では彼らに及ばないものの、世界史に対しては好意的で意欲的な学生たちの、その興味や関心を抛りどころに

構想され、実践されていくことになる。史学科に進んでくる「歴史好き」の学生は高校における歴史教育のひとつの「成果」であるが、彼らもまた、そして場合によっては彼らの方がより直接的に、大学において歴史を学ぶことの難しさを感じているかもしれない。彼らが抱える課題を明らかにし、その解決に向けた取り組みを続けるなかで、大学における世界史系授業全体の改善に向けた手がかりも得られるだろう。

なお、本研究は、岩手県立大学学部等研究費（研究課題名：『世界史教育と外国史研究との連携・協働に向けた総合研究—岩手県における世界史教育の現状と課題—』（代表 吉原秋））から助成をうけたものである。

5. 参考資料・文献

・資料

大学改革支援・学位授与機構『大学教育における分野別質保証の在り方に関する調査研究報告書』（2017年3月）
http://www.niad.ac.jp/n_shuppan/project/_icsFiles/af/fieldfile/2017/06/08/no09_nr17-0608.pdf

高大連携歴史教育研究会「高等学校教科書および大学入試における歴史系用語精選の提案（第1次）およびアンケート実施」

http://www.kodairen.u-ryukyuu.ac.jp/new/new_91.html 高大連携歴史教育研究会提案「歴史系用語精選の提案（第1次）」
http://www.kodairen.u-ryukyuu.ac.jp/pdf/selection_plan_2017.pdf

・文献

吉原 秋, 小川春美, 鈴木道也, 安井萌, 小川知幸, 畑奈保美, 津田拓郎 (2016), 世界史履修に関する短大生の意識調査, 岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集, 第18号, 59-64

鈴木道也, 吉原秋, 小川春美, 安井萌, 小川知幸, 畑奈保美, 津田拓郎 (2016), 大学における世界史教育の現状と課題(1)—世界史学習に関する大学生たちの意識調査—, 岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集, 第18号, 65-71

小川知幸, 吉原 秋, 小川春美, 鈴木道也, 安井萌, 畑奈保美, 津田拓郎 (2017), 高校での世界史履修に関するアンケートのテキストマイニング分析, 岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集, 第19号, 67-73

吉原 秋, 小川春美, 鈴木道也, 安井萌, 小川知幸, 畑奈保美, 津田拓郎, 池野健 (2017), 世界史履修に関する学生の意識調査と今後の研究の展望, 岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集, 第19号, 63-66

- 安井萌, 吉原 秋, 小川春美, 鈴木道也, 小川知幸, 畑奈保美, 津田拓郎 (2017), 世界史学習に関する岩手大学生の意識調査, 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第 16 号, 93-102
- 西村拓生, 藤本夕衣, 松浦良充 (2014), 「高等」教育とは何か: 思想史が問う (コロキウム 5), 近代教育フォーラム, 23 号, 259-267
- 江原武一 (2015) 『大学は社会の希望か-大学改革の実態からその先を読む』 東信堂
- 絹川正吉 (2015) 『「大学の死」、そして復活』 東信堂
- 松浦良充 (2015), 「教養教育」とは何か, 哲学 (日本哲学会), 66 号, 83-100
- 徳橋曜, 小林真 (2016), 高等学校の世界史教育と大学の歴史学: 歴史教育の接続の観点から, 教育実践研究: 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 11 号, 143-157
- 吉見俊哉 (2016) 『「文系学部廃止」の衝撃』 集英社 (集英社新書)

表2：史学科で学んでみたら、実際には……

学年	大学で「歴史」を学ぶということは……だと思っていた	実際に大学で学んでみたら……だった	専攻 (1年生は 確定前)	
1	1	暗記をすること	歴史を研究すること	西洋史学
2	1	高校での歴史学習の延長	受け身だけではない、それまで以上に深いもの	西洋史学
3	1	高校歴史の延長	より狭くより詳しいもの	西洋史学
4	1	歴史を知る	史料を読んで歴史を読み解くこと	西洋史学
5	1	世界史をより詳しく学ぶこと	狭い範囲を学ぶもの	西洋史学
6	1	知識を蓄えること	知識を蓄えるための手段の方が大事と感じられるもの	西洋史学
7	1	新しい知識を知ること	知っていることを本当に調べること	西洋史学
8	1	単純に歴史だけ(主に政治・経済史)を学ぶだけ	哲学、文学、社会学など様々な学問が交わりながらできている学問	西洋史学
9	1	歴史の流れを学ぶこと	様々な視点から出来事を考察すること	西洋史学
10	1	高校までで習ってきたことを深く掘り下げる	様々な範囲ををまばらにやっている感じ	日本史学
11	1	専攻があるとしても全体を見る歴史	専門的である時代の宗教のことであったり農民に目を向けたもの、といったより狭めて学ぶ	日本史学
12	1	歴史の流れを学ぶもの	一点に焦点を当てるもの	日本史学
13	3	高校の延長	研究	西洋史学
14	3	歴史をより奥深く研究すること	現代と歴史を比べたり、時代ごとに比較などが多い授業	西洋史学
15	3	高校世界史が元となる詳しい研究	教授の専門性と自分の興味対象の一致の難しさ	西洋史学
16	3	すごい細かい歴史を知ること	物事を違う視点から見るところが難しいし、文献を見つけるのが思ったよりも大変	西洋史学
17	3	高校よりもより深く様々な出来事を追っていくようなこと	過去を学ぶことで現在と比較したりといった、出来事を通してどのように考えるかといったもの	西洋史学
18	3	広く浅く	狭く深く	西洋史学
19	3	ただ時系列に沿って出来事を暗記する	自分で考えをまとめる機会が沢山ある分野	西洋史学
20	3	たのしいこと	つまらないもの	西洋史学
21	3	過去にあったことを知る	過去にあったことを模索する	西洋史学
22	3	自分の好きなことを自由に調べて歴史を紐解いていくもの	他人の発表を聞いてばかり	西洋史学
23	3	出来事を学ぶこと	歴史を自分の視点から見る	西洋史学
24	3	視点を変えながら研究するもの	ある部分に重点を置きつつ、それを補う形で他の視点を取り入れて研究するもの	西洋史学
25	3	テーマを絞ってより詳しく学ぶ	思っていたよりも概説的なもの	西洋史学
26	3	歴史の本質を捉える事	概要重視	西洋史学
27	3	実際の史跡や現場に行き、現物から出来事を学び考察すること	資料を照らし合わせ、緻密に自身の考えを組み立てていくこと	西洋史学
28	3	様々な時代や分野について広く深く学ぶこと	一つの分野にしばられる、自分の興味のある分野の教授がおらず学べる分野に限られる授業	西洋史学
29	3	アフリカごなどの地域史だけでなく、都市や疫病などのテーマ史を中心とする勉強を主に行っている(今の専門選択にあたる部分をそう予想していた)	年代などの区分はあるにしろ概念や通史を中心としたもの	西洋史学
30	3	高校の世界史の内容を多少深く学んでいくこと	こんなに専門的に歴史を学ぶことになるとは思わなかった	西洋史学
31	3	高校と変わらず教科書通りのもの	専門的なことを分析・考察するもの	西洋史学
32	3	専門的なもの	歴史の考え方の勉強	西洋史学
33	3	歴史を暗記で覚えるもの	色々な説を取り上げる考察学	東洋史学
34	3	議論が多いもの	講義がおおいもの	東洋史学
35	3	歴史そのものを重視するもの	歴史の書かれ方を重視するもの	東洋史学
36	3	受動的に知識を得られるもの	得た知識を用いて、能動的に学習していくもの	東洋史学
37	3	高校の延長線上	専門性が強い	日本史学
38	3	暗記すること	学術書を読むこと理解することができるもの	日本史学
39	3	勉強すること	調べ、考察すること	日本史学
40	3	高校の授業の内容をより詳しく学ぶの	1つの物事をより多面的に見て、ただ単に事実を受け止めるのではなく一つ一つを疑って見る	日本史学

学年	大学で「歴史」を学ぶということは……だと思っていた	実際に大学で学んでみたら……だった	専攻
41	3 表面的に有名な所を学ぶ	木簡や郡家だけで15回授業をやる	日本史学
42	3 高校時代に学んだ歴史より一歩進んだ歴史を学ぶもの	自分でその歴史上の出来事に関わる史料を見つけ出し、それらを自分で読み解き解釈をしていくもの	日本史学
43	3 通史をより詳しく学ぶこと	ある歴史的事象に関して綿密に研究すること	日本史学
44	3 受けている授業の一つ	研究課題の一つ	日本史学
45	3 高校の歴史の延長	もっと深く専門的なもの	日本史学
46	3 特殊	多角的	日本史学
47	3 好きなことを研究できること	史料による制約などがあり、なかなか思い通りに進まないこと	日本史学
48	3 通史を学ぶこと	一部の時代の文献や資料を深く掘り下げること	日本史学
49	3 ある特定の時代を細やかに教えてもらうこと	教えてもらうのではなく、自分で史料を読んで調べること	日本史学
50	3 高校の時と大して変わらない講義形式のみの授業を行うの	たくさんの歴史書や論文を読む事	日本史学
51	3 浅く広くをちょっと深くもっとと広く	めっちゃめっちゃ狭く深く	日本史学
52	3 概説的な学習	学習というより研究	日本史学
53	3 ストーリーにのって語られている	いかに事実に基づいて、かつ関連づけられるかというもの	日本史学
54	3 一つの分野についてひたすら研究すること	広く深く見なければ本質が見えてこないもの	日本史学
55	3 知識を増やすこと	事実を見つける	日本史学
56	3 全体をより詳しく学びながらも専門的にやる時代も絞って勉強していく	全体を学ぶということは概説でもおこなわれることはなく、全て絞られた時代の中で勉強していくため、興味のある歴史が分かれていた場合、どちらかを取捨選択しなければいけないという	日本史学
57	3 表面的	様々なことが入り混じって起きること	日本史学
58	3 暗記科目的	実証的	日本史学
59	3 詳しく学ぶこと	専門的に学ぶこと	日本史学
60	3 より専門的な出来事や人物を学ぶ高校の授業の延長線上のようなもの	歴史学という学問的な研究	日本史学
61	3 歴史を広い範囲で体系的に理解すること	狭い範囲で断片的に理解すること	日本史学
62	3 概説を学ぶこと	史料を検討すること	日本史学
63	3 高校の延長の様に通史を学んでいくだけ	通史を学んだ上でそれぞれの教諭陣の専門や高校までの歴史では触れることになかった農村社会など細かい歴史を学ぶことができたこと	日本史学
64	3 歴史用語を覚えること	歴史学として歴史を検証すること	日本史学
65	3 事実を淡々と知っていくだけのこと	自分で史料などから根拠を辿って学ぶこと	日本史学
66	3 各年代の知識を広く深く学び、歴史の知識全般を増やすこと	ピンポイントの事象の研究	日本史学
67	3 ある出来事を覚える、どちらかという受動的	主体的に新しい考えなどを見つけないといけないもの	日本史学
68	3 高校歴史の延長のようなもの	自分なりの視点で歴史を紐解くもの	日本史学
69	3 実際にゼミの中でフィールドワークをしたりするもの	座学、本と向き合って調べるもの	日本史学
70	3 もう少し大きな枠組み	かなり専門的	日本史学
71	3 もっと深く学ぶ	確かに深くは学んでいるが、今までの概念を覆されることもある	日本史学
72	3 高校の授業の延長	専門分野や専攻がありある特定の分野に集中してやるもの	日本史学
73	3 講義形式でこれまで学んできたことより深く学ぶこと	自分で調べて研究するもの	日本史学
74	3 高校における歴史の延長上	文献ばかり	日本史学
75	3 現代に至るまでに何があったかを知ること	当時の人々の活動・文化を通して、その時代とどんな影響があったのか、何が起ることになったのかを史料を用いて証明すること	日本史学
76	3 自分の好きな分野のみを研究するもの	歴史全体について学びそれから好きな分野につなげて行くもの	日本史学
77	3 概念やストーリーをより深く学ぶこと	論理性を磨くこと	日本史学
78	3 歴史の全体を勉強するもの	特定の時代の細かいことを研究すること	日本史学
79	3 話を聞いて覚えること	自分で研究すること	日本史学
80	3 歴史全体を見ること	一人の人物に焦点を当てたり、より細部まで学習すること	日本史学
81	3 座学で詰め込むもの	史料を用いた実践	日本史学